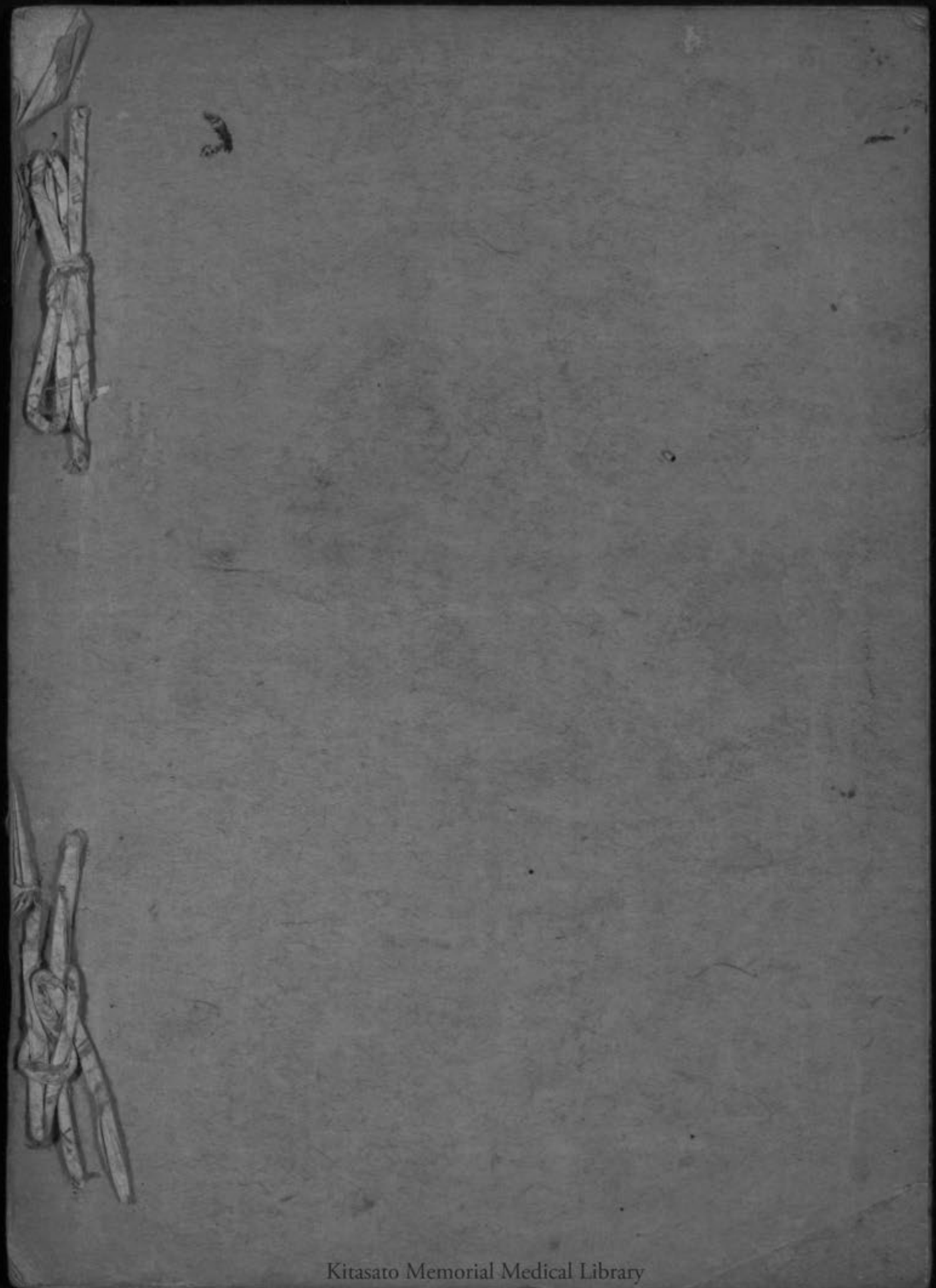

医師略伝覚

F
イ−67

蔵毬

参河実記九其折節唐医リ白唐醫諸國ヲ徘徊シテ病ヲ療ス此時ニ州ニ在テ築山殿ヘ参ル築山殿之ヲ愛シ後ニ八三郎殿ニ志ヲ合セ此医師ヲ以テ

野

甲府ニ志ヲ通シ玉フ由浮説云云

依

依道林

関原軍記廿九江渡川ニ藤堂高虎粉骨ヲ振フ節渡辺勘左衛門

伊澤文庫

慶應義塾大學醫學部北里圖書

慶應義塾大學醫學部北里圖書

490.28
I

慶應義塾大学医学情報センター
昭和 47年 6月 22日

No. 799

富士川文庫
263

小西カ兵ト組テ道首ヲ打左ノ手ノ首ノ所ヲ深ク切ラレタリ戰以後赤坂ノ病ニ隙シ晩景ニ至リ手負ノ療治スルニ野依道林トイフ手医師外科上手ニシ疵ヲ見テ少シニテモ脉所エカヽリ悪キ所故平愈シ難シ此疵今ヲ少シ上タル寸ハ譬ヘ切離テモ療治アリテ別条ナシ此疵ニテハ死スルト云フ寸ニ作左衛門聞テノ此所可然ヤト黒墨引シテ即時ニ切落シタリ此時諸人勇敢ニ驚ク既ニ療治シテ平愈スル高虎大ニ感シテ足輕組三十人ヲ預テ二百石ノ加増メ五百石ニナル

清隱翁

默雲稿

南泉清隱翁諱友弘以醫為業救人之急不求其報廿六以之為喜

也常歎曰吾学盧扁之技者久矣然薬有陳新方有古今焉唐二鄭本草新薬旧薬凡一千八十二種也誰辨真偽哉録両刀圭匙煮炒煨炙失其候則変微恙為沈綿医家可慎者也人参甘草窮麝香龍脳之類不産吾土待南船用之苟无南信則袖手於急病之傍豈不慨喟乎吾今附進貢船入大明國求薬材今吾邦之人沐大明皇帝之徳則如何余曰善莫大於此作相不濟民者作医以濟人濟斯民於仁寿之域者在其斯一歟吾佛書曰東方琉璃界有大醫王佛援濟衆生業苦今自東方發大願船可謂医王善巧方便也因歌一章以勗壮志云

滄
海無波化日長遠遊求薬出扶桑
八荒寿域大明國傳得応来不老方

五雲子

先生氏ハ王名ハ玨（ガク）字ハ寧宇五雲子ト号ス又タ紫竹道人ト号ス明人福建大原ノ人ナリ父ハ郎チ大原ノ守也五雲子本邦エ渡来ノ王氏ヲ諱テ大原ヲ氏トス

法印森雲仙ハ五雲子ノ舊弟子ナリ

常憲院様ノ御時被召出侍御医トナル或時五雲子ノ氏名御尋ノ時イカナル故ヤラン字ヲ瑩ハ翁ト書キ上ニフレタル由雲仙口実之

弱年部屋住ノ時日本ノ知行二千石程ヲ領ゼラル其比后妃ノ兄カ弟カコレト心友ニシテ儒道兵道ノ同門ナリ然ニ此人叛逆ノ意アリ其事露顕シテ終ニ刑罰セラレタリソレヨリ朝廷郷閣ニテ五雲子モ同類タル由風聞セルシヲ

毋人殊ノ外危懼シテ家人両人ヲ従テ朝鮮國エ出奔セシメラ朝鮮在留中毋人ヨリ給用豊饒ナリシ其内二人ノ内一人ハ家人病死セリ五雲子存念コレヨリ日本エ渡ルヲ見バヤトテ長崎エ渡リ逗留ノ中残リ一人ノ家来モ死亡シ本國毋人ヨリノ給用便宜モ断絶シ困窮ニ及フ其節長崎ニ大明一庵トテ唐人ノ名醫アリシニ医術ヲ学テ産業トス異國人長崎ニ来住三年ヲ過レハ帰サレヌ御國法ユエニ長崎ニ居住セリ此間ニ日本言語モ悉ク能通セリイカナル縁ヤ有ケン北陸道エカヽリ出羽ニ到リ佐竹殿城下秋田ニテ医ヲ業トシ居住其後其江戸エ出府秋田ヲ出立ノ時居住ノ亭主酒屋エ穀館ノ報恩トメ治労ノ薬方ヲ傳エ置ケリト佐竹太膳大夫殿

幼名菊千代ト申ニタル時嘉内薬ヲ服用其節手医者ヱ尋シニナル程只今ニ至リ其酒屋ニ五雲子薬ト申シ調合致セ労咳ノ病人ハ求テ用ユ其薬ニハ酸漿（ホヽツキ）蝗螽（イナゴ）ノ入ヨシ聞ケリト

江戸ニテ澁紙包ニ薬ヲ入懐中メ常中ヲ脉トラウ〳〵トテ往来セリ年ヲ経テ治験多ク世上ニモ聞ヱタリノ其時

大猷院様ノ御出（頭）堀田加賀守殿十死ノ病氣ニテ諸医手ヲ束子タルニ先生薬ヲ投シ数日ナラズメ快復リノレヨリ大ニ名ヲ振ヒ諸大名方ヱ請召次第ニ富豊ナリ其紺屋町ニ室宅ヲ構ヱ末期ニハ土蔵五ケ所其内ニ餽贈ノカ財物ヲ積置ク万治三年庚子四月廿六日逝去ニ因ノ大乗寺ニ葬ル法

諱ハ東山鎮院晴雲日輝居士ト号ス女子一人男子二人アリ長女ハ初メ門人雲也ニ嫁シ雲東ヲ生ム雲也死後愛宕下御小姓組内藤久五郎ニ嫁シ子アリ久五郎後ハ治左衛門ト改ム此人ハ権現堀ノ此松平三蔵ト云フ人ノ子孫也

次子雲南（後ニ雲庵ト云フ）此人放蕩ニシ

先生ノ遺財ヲ携持チ医術修行ニ托シ長崎ニ遊行シ金銀ヲ多ク失シテ白手ニテ江戸ニ帰リ逹窮ニテアリシ真田伊豆守殿ヨリ少シノ扶持ヲ得テ渡世シ元禄八年乙亥十二月十三日卒死ス其時内藤氏ノ室ヨリ急ニ吾ヲ召ル吾コレヲ聞キ速ニ馳行タレ氏モハヤ息絶ス唯一女子アリ嘉内媒シ紀州ノ御家老水野土佐守殿

ノ医者小野道圓方ヘ金子十両
出シ嫁セシム不縁ニテ離別ス後ニ
御医者生野松壽方ヘ嫁ス雲南
死後五雲子遺方并一生所持ノ
薬箱ヲ内藤氏室ヨリ吾方ヘ贈
リタマフ

内藤氏ノ室父五郎一死後爲尼
トナリ長壽院ト号ス此人吾
幼時ヨリ吾ヲ愛憐ニテ子ノ
如ス先年聞シ所秋田ニテ傳与
ノ方ヲ尋タルニ其全方ハ知ラ
ズ酸漿鼠螽ハ薬用トテ日ニ
乾収メ貯ヘラレシト云雲仙家ニ
モ吾方ニモ此方傳ラズ

雲東雲菴ノ厳塔ハ五雲子
石碑前ニ在

五雲子何モ著述ノ書ナシ土岐長元
作ル所ノ医工入式ノミ先生ノ作ナリ

先生ノ手跡ヲ永代極メ札ニシ出サレ候様ニ古筆了音ヘ頼ミ談セシニ得心ニテ吾方所持ノ李白瀑布ノ詩ニ極札ヲ出ス是ヲ褾具シ置ク又了音ヘ手鑑ノタメ丑雲子手書一枚遣シ置之

延享二乙丑年十二月十日

嘉内七十六歳記之

中原貞説（本朝医考 和気氏下ニ出）

著聞集術道門ニ宇佐大宮司なにがしとかや癩病をうけたる家国守へ告て一門の者共改補せらる無きよし訴へ申しけれども大宮司たちのぼりて医師にこゝろみさせて実否をさだめ給ふべきよし奏し侍りければ和気丹波のむねとあることどもに治有

李朱中京更説をおこしくて
に至りては偏るを頼りて李朱
各自らんとして病のよし我奏
志らずして療治すべきよしの勘文
なるべきより作下されけれども
めしよ戻出てあるしく和ら
すべきよし申し李朱に負説しまする、
浙の十代の才して一巻の文書の
著しきあり翻りて依る後の
子は当所にて考ひべしとして別
あるしてい李朱ころくの医
書を写してリの色てやしく
治しより李朱が慶感有て
やうくしに随て和家の姓
我後ゞ世を家後ちの諸陰云ゞ
成てある孫いまに存くだ

陳明德

長崎春德寺ニ墓アリ安

東省菴碑文ヲ撰ス